

## イリ地域調査報告 シンジルト

### 1 はじめに

2006年8月4日から9月15日にかけて、新疆イリ地域とりわけジョウソ（昭蘇）、テケス（特克斯）、ニラカ（尼勒克）の三県において聞き取りを中心に予備調査を行った。

天山北路の大半がジュンガル盆地とされていることから伺えるように、ジュンガル・モンゴル（オイラド・モンゴルの一部）は、中央アジアの近代史形成に重要な役割を果たしてきた。また現在、「新疆13の世居民族 Localized Nationalities」の1つとされる新疆モンゴル諸族は、自治区内において2つの民族自治州と1つの自治県をもっており、現代新疆の社会文化を考える際にも重要不可欠な存在となる。

ここでいう世居民族は、先祖代々そこに居住していた民族集団をさすものであり、ネイティブや先住民族とほぼ同義語となる。イリ地域における世居民族のひとつであるモンゴル族は、ジュンガル・モンゴルの末裔とされ、モンゴル諸族の内部ではその部族名で「ウーレド」と呼ばれており、主に、上記三県に暮らし、総人口は約3万人である。

彼らを主な調査対象にし、彼らを取り巻く地域社会の文化変化の動態を時空間の両方から考察することで、イリ地域の社会や自然環境の変動の一側面を浮き彫りにしたいというのが、調査者の狙いである。そこで調査者は、①オーラルヒストリーにみられる地域集団の移動の諸相および集団間関係、②宗教信仰や日常慣習そして禁忌にみられる地域集団の自然認識の特徴に関する調査を行った。③具体的には、1つの手がかりとして「ツェタル」という現象に着目し、集団内部の世代および生業形態の変化とその自然認識の再構築との関係を考察しようと試みてきた。

けれども、予備調査という性格上の問題やプロジェクトのその他の構成員との情報共有の重要性を考えて、この調査報告書においては、特定の調査項目に関するミクロな記述分析を回避することにした。むしろ、現段階において調査地域全体の様子を概観することが大事という見地に立ち、以下、集団、土地、信仰、生業の4項目にわたり、調査者が現地で見聞した社会文化的な一般情報を網羅しておきたい。

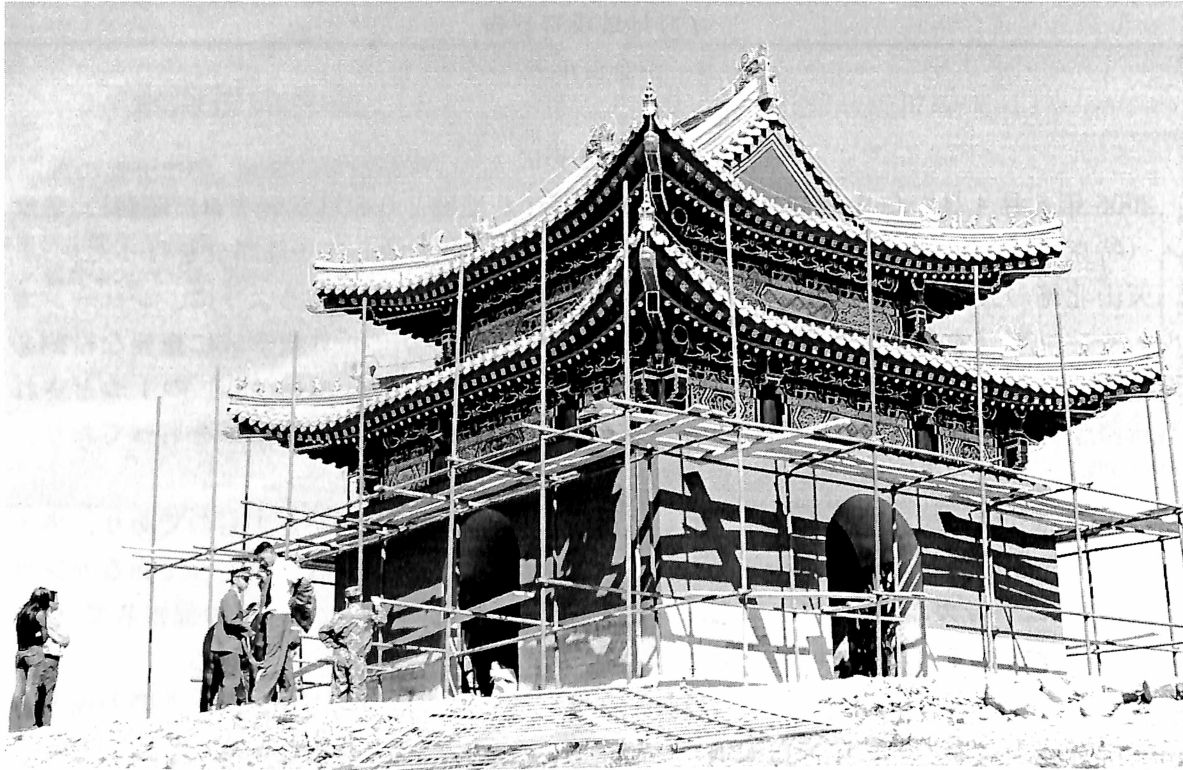


写真1 カザフスタン共和国との国境地帯に聳える「ゲデン碑」。1760年清がジュンガル・モンゴルに対する軍事的な勝利を収めたのを記念して立てた碑文を保管している建物。

## 2 集団、移動

イリ地域は民族の坩堝であり、それは絶え間ない集団の移動によって持たされた結果である。地域における自然環境の変化を考える際、集団移動の時間的動向を把握することが重要である。

三県のいずれも、イリカザフ自治州の直轄下にあり、カザフ族をはじめ、多様な民族集団が入り混じった複雑な社会文化的な状況を呈している。ジョウソ県は2つのモンゴル族自治郷と1つのキルキズ族自治郷をもち、全県各民族集団の人口は多い順に、カザフ、漢、ウイグル、モンゴル、キルキズ族となる。テケス県はモンゴル族自治郷とキルキズ族自治郷をそれぞれ1つずつもち、各民族集団の人口は多い順に、カザフ、漢、ウイグル、回、モンゴル、キルキズ族となる。ニラカ県は1つのモンゴル族自治郷をもち、各民族集団の人口は多い順に、カザフ、漢、ウイグル、回、モンゴル族となる。

民族のモザイクというべきである。上記主要な民族集団のなかで、当地域での居住の歴史が最も長いのがモンゴル族であり、主に17世に移住して来た人たちの末裔である。ジョウソ県モンゴル族は、県総人口の9%を占め、大よそ1万3千人であり、新疆において最もモンゴル族人口が多い県のひとつと言われる。ニラカ県モンゴル族は、県総人口の5%を占め、7千人であり、ジョウソ県モンゴル族と基本的に同様に、ウーレド人といわれる。テケスモンゴル族は、県総人口の4%を占め、5千人であるが、ウーレド人以外他モンゴル部族の人間もいる。

他方、人口的マジョリティであるカザフ族は主に、19世紀から20世紀前半にかけて、ロシア帝国・ソビエト連邦側（現カザフスタン共和国）から移住してきた人たちの末裔で

ある。主な部族はケザイやアラバンである。また、三県は、1940年代の三区革命の発祥地であり、カザフやモンゴル族を中心とする革命の中堅幹部そして騎兵隊を数多く送り出したところである。なお、漢や回族などの民族集団は、主に、解放（20世紀50年代）以降、大規模に移住してきたとされる。

言語系統的に、漢語以外、同じアルタイ語族であるため、諸言語間の相互影響、コードスイッチングが多くみられる。民族集団単位でいえば、モンゴル族のほうがより多くの言語を獲得する傾向があり、母語以外、カザフ語をはじめ、ウイグル語そして漢語が堪能な者が多い。カザフやウイグル族の場合は、母語以外漢語が話せる者も多い。漢族の場合は、少数民族言語を日常的に使用するケースが少ない。

定住化政策などによって、境界が徐々に曖昧になっているが、モンゴルとカザフは牧畜、漢とウイグルは農業という民族集団と生業形態の対照的關係が依然見られる。モンゴルとカザフは同じ牧畜民として生活習慣などの面で共通のものを多くもっている。宗教信仰の違いから、親や親族から反対されることもしばしばあるものの、通婚もみられる。類似現象はほかの民族集団間にもみられる。

他方、近年宗教的なアイデンティティが、より強化されているようである。そのため、「毛沢東時代は、モンゴルとカザフ両民族の關係はよかった。宗教などについてはいけなかったからだ。でも今、宗教が強調されるようになっていたので、みな別々になってしまった。昔、われわれのところに来て、お茶飲んだり、飯を食ったりしていた。しかし現在は、カザフ人が豊かになり、宗教的な拘りも強くなり、来なくなった」というモンゴル族老人が多い。

カザフスタン共和国が独立以降、カザフスタンへ移住するカザフ人世帯が増加しており、残された（処分された）牧地には、寧夏回族自治区など新疆外からの移住者が来るようになってきているようだ。



写真2 カザフスタン共和国に移住したカザフ族住民が処分した牧場(ジョウソ県ある村)で生活する、寧夏回族自治区から移住してきた回族住民の一家。

### 3 地名、意味

意味のない地名はない。地名自体の変化や地名をめぐる地域住民による意味解釈の変化から、自然と人間の関係変化の歴史的な背景を、ある程度見出すことができる。

ジョウソ(昭蘇)県は漢語名であるが、それは、「6つのソム(ジョルガン・ソム)」というモンゴル語の複合名詞の頭文字を組み合わせた漢語造語である。三県のモンゴル人たちは、その内部においていまも清時に形成した「ソム」という行政名で、呼び合う習慣をもっている。ジョウソ県は6ソム、ニラカ県は10ソム、テケス県は4ソムといった具合である。

現在、ジョウソ県は正式な行政名になっている。しかし、日常生活において、漢語を操らない限り、カザフやウイグルそしてモンゴル人たちは、普通ジョウソ県のことを「モンゴル・クレー」と通称する。モンゴル語で「モンゴル・寺院」の意である。テケスとニラカの両県名もモンゴル語であり、それぞれ「川の多い草原」と「幼い」を意味するといわれる。

県名に限らず、多くの郷や村までの行政名そして河川や山岳など自然に関する固有名詞の多くがモンゴル語であり、名の意味は必ず1つないし複数の伝説に支えられているようだ。しかし、「カザフ人が増えたことによって、もともとのモンゴル語の地名がなぜか、ほとんどカザフ語になり、語源もカザフ語だと解釈されるようになってしまった」というモンゴル人知識人が多くいる。彼らに言わせれば、こうなってしまった責任はモンゴル人自身にあるという。「ここに移住してきたカザフ人に地名のことを聞かれたモンゴル人たちは、地名だけではなく地名の意味まで教えてしまった」から、カザフ人たちはその意味に基づきカザフ語を与えたため、その地名がそのままカザフ語に切り替えられたからだという。

つまり、意味さえ教えていなかったら、カザフ人もモンゴル語の地名をそのまま音読みするしかなく、後になってカザフ語に語源をもつ地名だという誤った解釈も生じ得なかったはずというわけである。このように、地名のポリティクスは地域的なコンテキストでも顕著にあらわれている。

さらに、地名やその意味をめぐる解釈から地域の自然環境の変化を間接的に窺うことができる場合もある。ジョウソ県ツァガン・オソン郷の住民たちは、よく川水を直接飲むのだが、水の色は白く濁っていた。この郷の名はツァガン・オソンという川の名に因んだものである。モンゴル語で、ツァガンは「白」、オソンは「水」であるため、ツァガン・オソンを直訳すると、「白川」となる。実は、この川は天山の雪解け水で出来ているためきわめて清いはずだった。清いという意味で、モンゴル人がツァガンと名づけたそう。言い換えれば、ツァガンはこのコンテキストでは直接色を指しているのではない。同様な理由で、ハラ・オソン(黒水)という名(実在する郷と川の名)も、その水が透明であることを指す表現であり、水の色が黒いということの意味しない。しかしなぜ今、ツァガン・オソン川の水が濁り、色も白くなったのか。一説によると、それは都市建設のため上流地域で石を取りすぎて、川の中の砂が浮遊するようになっていたからだ。川が今のようになり白く濁るようになったのは1990年以降のことであり、それまでには透明であったとい

われる。

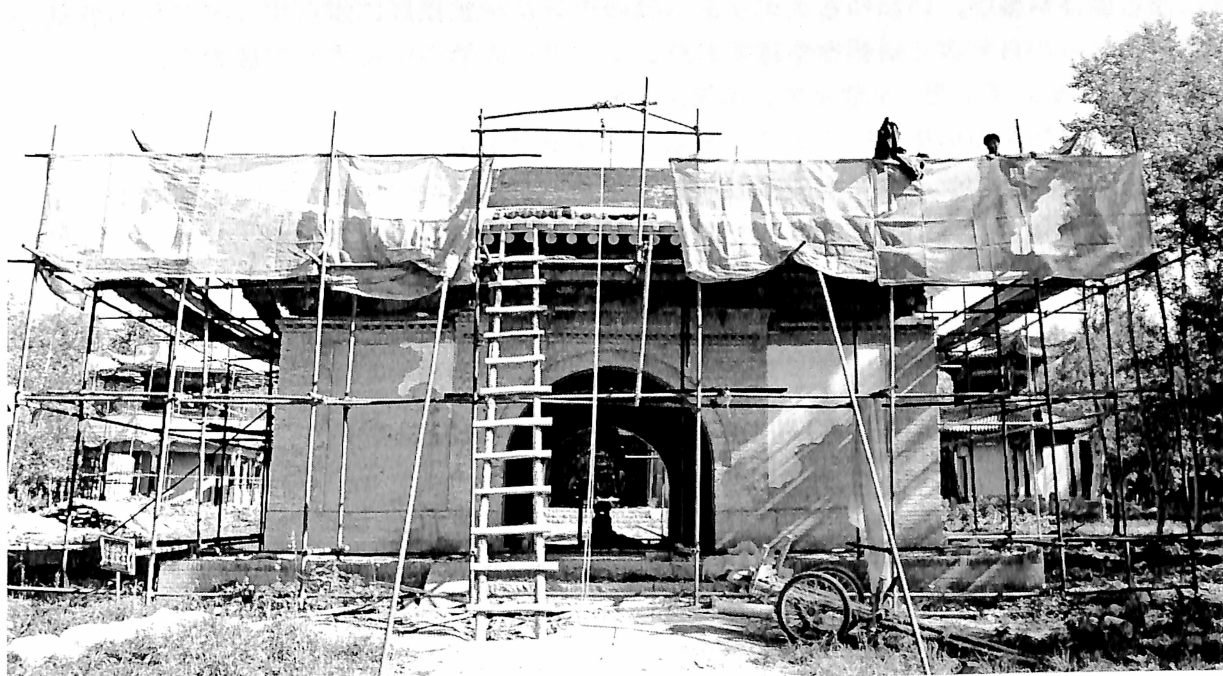


写真3 モンゴル・寺院という名の元となった、ジョウソウ県にあるチベット仏教寺院の「聖祐廟」の境内。1894年に建てられたが、老朽化が進み、近年大規模な改修工事が行われている。

#### 4 信仰、伝達

人間と自然との「あるべき関わり方」は、広義に言えば、宗教信仰によって大きく規定される。狭義に言えば、ローカル・ノレッジの伝達に依存している。

三県における伝統宗教はイスラム教と仏教に二分できる。カザフ族とウイグル族社会においてイスラム教が優勢であるに対して、仏教（チベット仏教）はモンゴル族社会において優勢を占めている。

既述した「モンゴル・クレー（モンゴル・寺院）」と通称されるジョウソウ県はもとより、テケス県（ケゼル・クレー [赤い寺] と呼ばれる）もニラカ県も、とりわけその中心地の形成はやはり仏教寺院の存在と深くかかわっているようである。

解放以降、土地改革や文化大革命を経て、土地を失ったりして各地域の仏教寺院のいずれも大きなダメージを受け、また強制還俗によって僧侶たちの社会地位著しく低下した。更に、迷信の排除や無神論的なイデオロギー教育の強化によって、社会全体における宗教の威信が失墜してきた。

けれども、文化大革命以降、寺院は国家からの資金を得て修繕され、出家の自由もある程度保証されてきた。チベット仏教の根拠地であるチベットや青海あるいは甘粛省に比べて、新疆地域における出家信者数が少ないものの、僧侶の数が着実に増えている。三県において、内モンゴルや青海省の仏教学校での留学経験を持つ僧侶もいる。その存在が社会

に認められ、仏教の社会地位が回復しつつある。冠婚葬祭などの儀礼の場において僧侶は中心的な存在となり、住民の日常生活における仏教の影響が強まっているようだ。

また、チベット仏教とも深いかかわりを持つ「モンゴル医学」は、地域社会において頼りになる場合が多い。いわゆるチベット仏教のモンゴル族住民に限らず、イスラム教徒のカザフ人たちからも広く信頼を受けており、モンゴル医師の所にカザフ族患者たちもしばしば訪れ、「モンゴル薬」を飲んで、病気がなおったというケースも少なくない。このように仏教は地域社会の伝統知識の伝達にも重要な役割を果たすようになっている。

他方、学校教育の改革によって宗教などに対する若い世代の態度が今後いかに変わっていくのかが注目されている。これまで三県における学校教育のあり方は、基本的に、母語による教育であった。つまり、カザフ、ウイグル、モンゴル、キルギズなど各民族の子供たちは、それぞれの民族母語で学校教育を受けていたのが普通であった。近年（21世紀に入って）からは、三県において「双語教育（バイリンガル教育＝漢語＋特定の少数民族言語を同時に教える）」と称される新しい教育システムが本格的に導入され始めた。実質上、漢語を教授用言語にする教育改革である。

僧侶たちの話によると、たいてい自分の民族母語で教育を受けない若者は、伝統宗教そのものに対する偏見を持ちやすいという。つまり、伝達方法（言語、ここでは教授用言語）の変化によって今後仏教離れが生じるのではないかとの指摘である。いずれにせよ、学校教育の改革がもたらす影響は、特定民族集団や宗教に限るものではない。



写真4 カザフ族女性患者の脈を診るテキサス県のあるモンゴル医師。

## 5 生業、開発

特定地域における人間と自然との関わり方を明瞭に表しているのは、その地域に形成された生業の形態である。人為的な側面を突出させた開発活動によってそれまで両者の関わ

り方がいかに変化していくのかを考えることが常に重要である。

解放まで当地域の生業は主に移動牧畜業であり、それに加えて小規模の農業もあった。前者主にはモンゴル人とカザフ人、後者は主にウイグル人が営んでいたようだ。

カザフ人はモンゴル人に牧草地を借りる形で牧畜を営んでいたが、モンゴル人の牧地利用は、全体から見て、今とは異なり、年間5種類の牧場をめぐって放牧していたようだ。すなわち、ハブルジン（3月から5月まで家畜が出産するまでの期間。主に平地）、ゾソラン（5月から7月までの期間。主に平地）、ホーツォン（8月から9月までの期間。平らな山）、ナムルジン（10月から11月まで雪が降るまでの期間。平地）、ウヴルゾン（12月から翌年3月までの期間。高地）である。

これは、牧地が広く人口が少なかった当時の状況に許されていた牧地利用形態だったといえよう。しかし、1950年代に入り、豊かな牧畜民が牧主といわれ、その家畜や牧草地が没収され、それまでの使用人や貧乏人に配分された。人民公社化時代には、完全に集団化された。1980年になると最終的に個人に配分された。けれども、そのときにはすでに、移民など人口の急増に伴い、一部の地域を除けば、移動可能な空間が減り、既述した牧地利用の形態が保てなくなったという。

1970年代には、内モンゴル自治区のやり方を模倣して、石の垣をつくった。1980年以降は、徐々に鉄条網を張り始めた。牧地の分割が勧められた。移動の自由が制限されたため、家畜のストレスが目立った。大規模な牧地分割は、2003年頃から本格的に展開されてきた。国家が補助金を出して10万ムや1万ム単位（村などの行政単位）で、牧地をまざり区切り、それからは世帯ごとに再分割するようになっている。牧畜民の定住化が一層進んでいる。

移動牧畜が制約されてきたのと対照的に、解放後、農業の規模拡大が持続的に行われてきた。その典型は、三県における「新疆生産建設兵団」の設立と成長である。その主体は退役軍人やその所帯など内地からの移住者たちである。地域自治体の行政権の管轄外にあるため、大規模農業を行ってきた生産建設兵団の存在は特殊なものである。生産建設兵団のケースを除けば、モンゴル人やカザフ人のなかでも農業化が進んでおり、いわゆる純粋牧畜業で生計を立てている住民の数が減少する傾向にあり、地域全体の生業形態のあり方は、半農半牧へ移行しつつある。なお、地域によっては発電などエネルギー開発に伴いダム建設なども行われている。そこで、ダム建設により、地域内部での人口の移動が行われており（例えばニラカ県からゴンリュウ県へのモンゴル族の集団移住が一例である）、コミュニティの再編なども注目されているようである。

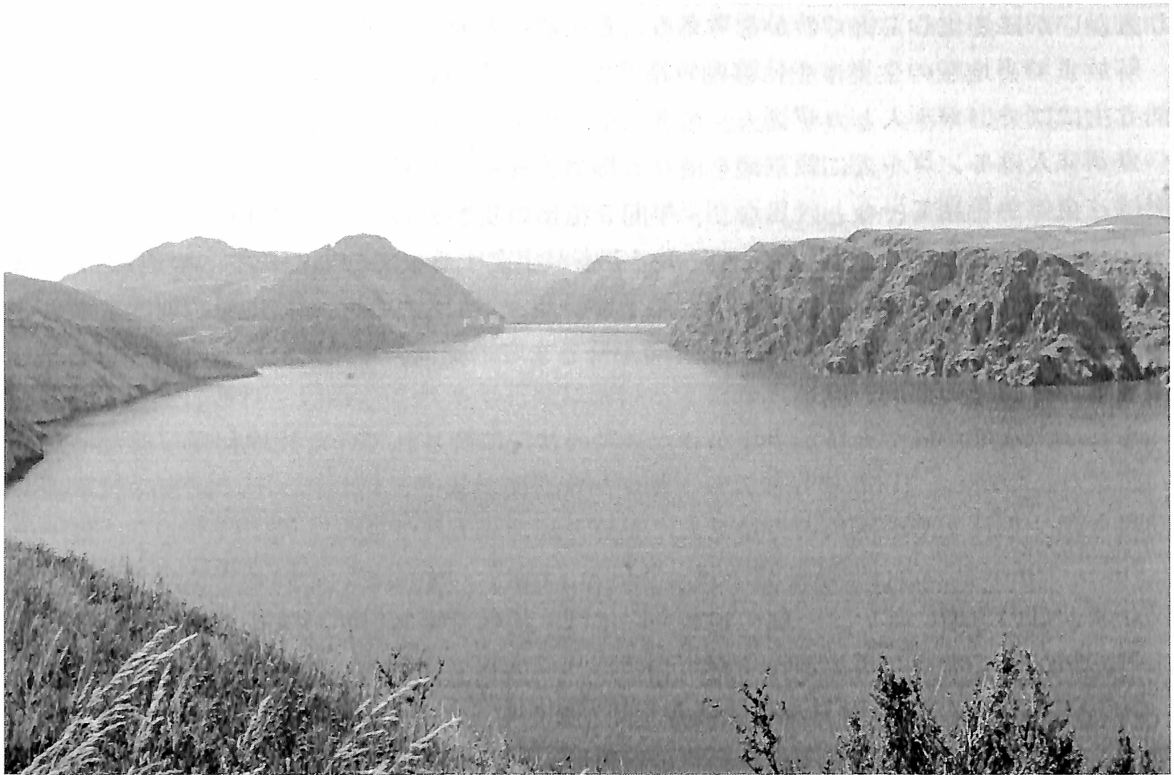


写真5 ニラカ県内のハシ（喀什）川の中流ジラantai（吉林台）地域で建設された新疆最大の水力発電所——2006年10月末に竣工した「吉林台一級水電站」——のダム。高さ157メートル、貯水容量25.3億立方メートル。

## 6 おわりに

冒頭に述べたように、本調査報告は、調査者が現地でえた情報——聞き取り調査データ——に基づくものであり、調査地域全体の様子を概観しようとするものであった。

ここに提示した情報の内容は、統計データなど文字資料に基づく情報とは必ずしも一致しないかもしれない。また、地域を概観すると標榜するには、4つのトピックスでは不十分であるかもしれない。

けれども、こうした質的データに基づき、地域における現在進行中の出来事や住民の関心事を取り上げたことは、当該地域を理解するために一定の意味を持つであろう。予備調査で感じた問題点を踏まえつつ、これから量的データと照合しながら、多方面から理解を深めていくことが重要であると考えている。



ISSN 1346-9355

# オアシス地域研究会報

---



第6卷 第1号

2007年2月

---

イリプロジェクト研究会  
総合地球環境学研究所

